

# 森田慶一がウィトルウィウスにみた「幸福」について

近藤 康子 京都橘大学

## 森田慶一の建築論研究のはじまり

森田慶一は、1922年に京都帝国大学(工学部建築学科助教授)着任の後、ウィトルウィウスの『建築に関する十書 De architectura libri decem』についての研究に着手し、自身にとって初めて「建築論」研究たることを標榜した「キトルーキウスの建築論的研究——特に数個の建築論的概念について——」(京都帝国大学博士論文、1932)を記した<sup>①</sup>。これは、1927年の論考「Vitruviusの六のカテゴリーに関する Jollesの説(1)」(『建築学研究』、1927.5)をはじめとして、同雑誌に発表した数編の論考と原典邦訳を纏めたものとして知られる<sup>②</sup>。

興味深く思われるのは、森田がウィトルウィウスに関する論考を初めて発表した時期と、博士論文として一つの結実へと至った時期である。森田と同様に分離派建築会に所属していた会員たちの動向を概観すると、1927年頃から1932年頃にかけては、個々の学究的展開において重要な時期であったように思われる。たとえば、堀口捨己は茶室へ、瀧澤真弓はパルテノンへと思索を深めてゆく。こうした動向について、堀口によれば世間から「分離派も新しくなりましたね」<sup>③</sup>と言われていたという。しかし、堀口はそれに対して「第一回の時よりも新しくなつてゐるとこそ思ふが今古くなつてゐるとは思へませんね」「とにかく近頃世間は新しがりやの假面をつけたことは確です。それで僕等が深さを増さうと努めてゐる所を見るともう進んでゐないなんて懸念が起きるにちがひない」<sup>④</sup>と反論し、各自が建築なるものの未知の領域へと歩みを進めていると主張した。

特に堀口に限ってみれば、かれは1927年に論考「建築における非都市的なものについて」(『紫烟荘圖集』所収)において茶室への関心を初めて示した後、1932年に論考「茶室の思想的背景と其構成」(『建築様式論叢』所収)を発表し、それを以降のかれの一連の茶室研究の結論であると同時に踏み出しのものと位置づけている<sup>⑤</sup>。これら二編の論考を見比べてみると、1927年のものは、1932年のものに比べて曖昧な箇所も多く、精査されているとは言い難い。しかしながらそこには、1932年あるいはそれ以降の堀口の茶室研究へと展開してゆく萌芽が確かに記されており、問いの本質に関わる内容がすでに多分に含まれている

①『建築論事典』(彰国社、2008)では、「おそらくわが国で最初に学としての『建築論』を標榜した論文であろう」(p.228)とされる。

②当時の森田の研究環境などについては、市川秀和「『建築論』の京都学派——森田慶一と増田友也を中心として——」、近代文藝社、2014に詳しい。

③堀口捨己「分離派建築會編輯者の手記」『建築新潮』、洪洋社、1928.11、p.14

④先掲書3、p.14

⑤堀口捨己「はしがき」『草庭』、白日書院、1948、p.3および堀口捨己「茶室研究」、鹿島研究所出版会、1969、p.6

ように思われるのである。

こうした観点から1927年頃の森田の論考を改めてみると、どうであろうか。

## 論考『『いみたちを・こるぶしえり』その他』(1928)

森田がこの時期、研究論文としてではなく、ウィトルウィウスに関する自身の見解を記した唯一の論考『『いみたちを・こるぶしえり』その他』がある<sup>⑥</sup>。ここに建築論研究者としての道を踏み出そうとする森田のすがたを、僅かにでも垣間みることはできないだろうか。論考をみると、ウィトルウィウスが建築を美という観点から論じたこととその背景について、森田は複数回にわたって丁寧に説明し、その重要性を示している。具体的にみてみよう。

論考で主に取り上げられるのは、博士論文で考察されるウィトルウィウスの六概念のうちの二つ、シュムメトリア Symmetria とエウリトミア Eurythmia についてである。それらの意味に関してはあまり踏み込んで考察されないものの、「シムメトリアとエウリトミアとは同一の概念であるのか、或は互に包攝関係にあるのか」<sup>⑦</sup>という一文に、後の博士論文へと続く思索の深さを予感することができる。まず森田は、シュムメトリアを「(引用注：ギリシアにおいて)潜在的であつた美的者」<sup>⑧</sup>、エウリトミアを「シムメトリアの概念によつて理解し得ない美しきものゝ原理」<sup>⑨</sup>とそれぞれ位置づけ、ウィトルウィウスがギリシアにおいては求められることのなかつた「建築の美しきもの」<sup>⑩</sup>に関する概念を新たに提示したことの意義を主張する。そしてその背景に、「愛美者」たるギリシア人の建築観と、「愛美者ではない」ローマ人の建築観との違いがあつたことを指摘している<sup>⑪</sup>。つまり、ギリシア人における建築は、基準尺度に準拠した比例に基づき世界秩序の一部を有することによって、美が自ずからに将来されるものであるのに対し、ローマ人における建築は、美が自然に与えられるものではなく特別な問題として認識されていた、という。

注目すべきは、上記をふまえたうえで森田が「希臘の愛美心が自由にして置いたものを羅馬の非愛美心が貧しい概念に固定してしまう」<sup>⑫</sup>として、ギリシアでは対象化されていなかった建築の美の問題をウィトルウィウスが対象化し論じようとしたことについて、漏れ落ちてしまうものがあることへの危うさを指摘する一方で、ウィトルウィウスを「希臘の愛美をその圏外に立つてながめることのできた幸福な男である」<sup>⑬</sup>とも述べることである。森田に「幸福」といわれるのは、ギリシアの愛美の圏内に安らうことではない。圏外に立つてながめることである。それはギリシアの愛美心が自由にして置いたものをそのままに受け止め傍観的にながめることではない。貧しい概念に固定してしまう恐れはあれども、その意味を積極的に問い論じようとすることである。そしてそれができるのは、愛美者ではないことを自覚し、美を追い求める者に他な

⑥ この論考では、タイトルの通りル・コルビュジエが主題とされ、コルビュジエの建築観に「希臘の技術がこゝに息づいてゐる」としてウィトルウィウスが取り上げられる。全5頁のうち約3頁程度がウィトルウィウスに関する内容である。以下では、ウィトルウィウスについて記された箇所を読解する。

⑦ 森田慶一「『いみたちを・こるぶしえり』その他」『建築新潮』、洪洋社、1928.11、p.4

⑧ 先掲書7、p.3。この箇所は、『森田慶一建築論集』(彰国社、1958)に再録の際、削除されている。

⑨ 先掲書7、p.4

⑩ 先掲書7、p.2

⑪ 先掲書7、p.4

⑫ 先掲書7、p.5

⑬ 先掲書7、p.4

らないと捉えていたと推察される。ここに森田のめざすべき建築論者としての一有様が示唆されているというのは言い過ぎであろうか。

14 森田慶一「建築論」、東海大学出版会、1978

森田は晩年に自身の建築論を記す<sup>14</sup>。森田にとって、ウィトルウィウスが一人の建築論者として常に自身の思索の基盤をなす者であったことは間違いない。森田はウィトルウィウスの建築論(強さ、用、美)に依拠しつつ、そこに新たに「聖」という概念を付け加える。このことは、ウィトルウィウスがギリシアの建築観に寄り添いながらも、建築の美の問題を新たに提起し、「希臘人が単に技術に過ぎないとしたものを超えてその一步を踏み出さん」<sup>15</sup>としたことと少なからず重なるように思われる。想起されるのは、森田がウィトルウィウス(ローマ人)を愛美者ではないとしたことである。愛美者ではないことが、建築の美について論じることを可能にした。すなわち森田にとって、自分(現代人)が何者であり、また何者でないのかを見極めることは、自身の建築論を記すうえで極めて重要な課題として据えられていたのではないだろうか。

15 先掲書7、p.4

最後に、森田が「聖」の提言に際して言い添えた文章を引用し、結びにかえたい。

「さらに、われわれは、ある建築に接して言いしれぬ神秘的な高揚された感情の湧き起こるのを意識したことがないだろうか。このような経験を与えてくれる建築は、現代においては、必ずしも多くはない。ほぼ宗教につながる建築に限られるといってもよい。まことに神秘は、現代人にとっては、縁のうすいものになっている。従って、現代建築がこのような超越的な神秘性の具現者として実存在する可能性はたしかに少ない。しかし、昔の人は、このような建築の実存在を求めて神殿や聖堂の建造に巨大なエネルギーを消費して惜しまなかったのである。現代においては逢うことの少ないこのような建築の存在様態をも見落とさないようにしよう。」<sup>16</sup>

16 先掲書14、pp.8-9